

氏名： 小林 誠 (Kobayashi Makoto)
所属： 人間文化創成科学研究科人間科学系
職名： 教授
学位： 修士 (法学) / Master in Law
専門分野： 国際政治
E-mail： kobayashi.makoto@ocha.ac.jp

◆研究キーワード / Keywords

グローバル化 / 権力 / 国家 / 平和 / 暴力
globalization / power / state / peace / violence

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・報告「戦争のためのリベラル・デモクラシー教程」、国際関係思想・研究ネットワーク第5回研究会「セキュリティの変容」、2008年4月26日、専修大学
- ・報告「世界認識としてのグローバル化—内破のための主体をめぐって—」、グローバル・ネットワーク21秋季シンポジウム「内からのグローバル化」、2008年9月27日、立命館大学
- ・報告「狼狽する国際政治学—人身取引をどう争点化すべきか」、立命館大学国際地域研究所「ヒューマン trafficking 研究の第2段階」第3回研究会、2009年1月24日、お茶の水女子大学

◆研究内容 / Research Pursuits

グローバル化によって、国際関係の構造的変容はどのように起きているのか。これを理論的・実証的に考察することが大きな目標である。国家と非国家アクターがそれぞれ構成する多層的な権力構造が現れ、国境を超えた権力作用が作られつつある。これは最も端的には、国家に独占されてきた暴力の行使の形態が変化し始めたことに現れている。

How has globalization transformed the basic structure of international relations? We must pursue this problem through theoretical and positivist studies. Today the multidimensional structure of political power which are constituted by state actors and non-state actors has appeared. Especially, the usage of political violence, which tends to be monopolized by the state mechanism, has begun to become transnational and privatized, and this symbolizes the beginning of the structural change of international relations.

◆教育内容 / Educational Pursuits

国際関係の知識を正確に学習させること、とりわけ動態的に理解させることに心がけている。現在、自分が目にしている世界像を過去や各地に投影して認識することが多いが、しばしばそれは歴史や世界の多様性を軽視した誤解に結びつく。そもそも国際関係の基本構想はどのようにして生まれ、どのように拡大し、どこまで動揺しているのか、を緻密に理解する必要があるだろう。

It is essentially important to learn international relations very correctly and dynamically. We tend to see history and local events depending on the analogy that comes from our observation of today's international scenery. But it often causes an error. We must understand how the basic structure of international relations was built, how it extended, and how it is transformed today.

◆研究計画

具体的には、人道的介入や「非軍事的な戦争」と呼べるような現象を、グローバリゼーションの中の国際関係の構造変動として考察する作業を進めている。これは、批判理論からの国際関係理論の大胆な読み替えや再構成をもたらすことになるだろう。これは同時にポスト実証主義論争への貢献でもある。こうした作業に伴い、国際関係の構造変動の関わる共同著書、地球市民社会についての共同翻訳、日本外交の変容についての叢書の分担執筆が計画されている。

◆メッセージ

多様な世界があること、それがめまぐるしく変化し、私たちの生活をドラスティックに変えつつあることを認識し、それを学問的課題として受け止めることがまず大切です。既存の学問はまさに「ミネルヴァの梟」なので、しばしば現実に追いついていきません。ときには学際的な英知を集め、大胆に知の再構成に挑むような蛮勇さえ求められています。